

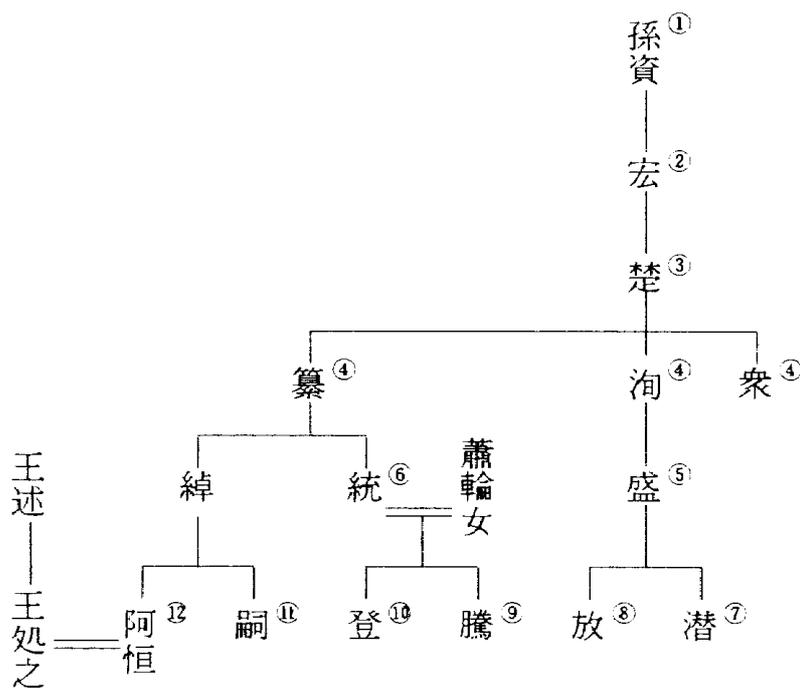
孫綽小伝

東晋の文人孫綽（三一四？～三七一？）の本伝は『晋書』卷五六にあり、その訳注はすでに『兵庫教育大学研究紀要』第五卷（昭和六〇年八月三十一日）に発表した。小稿は孫綽の本伝を補い、孫綽の文学を究明するための基礎作業をなすものである。

小稿は『魏志』『晋書』『世説新語』および注に引く諸書を資料とし、Ⅰ孫綽の家系、Ⅱ孫綽の交遊、Ⅲ孫綽の評価を追うことにする。

Ⅰ 孫綽の家系

孫綽の家系を図にすると下記のようになり、後に各人の伝記を引用する。



長谷川 滋 成

① 孫資

- (1) 資、字は彦竜。幼くして岐嶽く、三歳にして二親を喪ひ、兄嫂に長ぜらる。業を太学に講じ、博く伝記を覽る。同郷の王允は一たび見て之を奇とす。太祖（曹操）の司空為りしとき、又た資を辟すも、兄の郷人の害する所と為るに會ひ、資は手ら刃もて讎に報いんとし、家属を將ゐて地を河東に避く。故に命に應ぜず。尋で復た本郡の命ずる所と為るも、疾を以って辞す。友人の河東の賈逵は資に謂ひて曰はく、足下は逸羣の才を抱き、旧邦の傾覆に値ふ。主將は殷勤し、千里に頸を延き、宜しく古賢桑梓の義を崇ぶべし。而るに久しく盤桓して、君命を拒違す。斯れ猶ほ和の璧を秦王の庭に曜かして、塞ぐに連城の価を以ってするがごとき耳。窃かに足下の為に取らざるなりと。資は其の言に感じ、遂に往きて之に応ず。功曹を署するに到り、計吏に挙げらる。尚書令の荀彧は資を見て嘆じて曰はく、北州の喪乱を承くること已に久しく、其の賢智は零落せりと謂ふも、今日乃ち復た孫計君を見るやと。表し留めて以って尚書郎と為さんとするも、辞するに家難を以ってし、河東に還るを得たり。（『魏志』卷一四劉放伝注所引『資別伝』）
- (2) 魏国の既に建つや（二二〇）、太原の孫資と俱に秘書郎と為る。是れより先、資も亦た県令を歴、参丞相軍

事たり。文帝即位（二二〇）し、放・資は転じて左右丞と為る。……黄初の初め（二二〇）、秘書を改めて中書と為し、放を以って監と為し、資を令と為し、各々給事中を加へらる。放は爵を関内侯に賜ひ、資は関中侯と為り、遂に機密を掌る。三年（二二二）、放は爵を魏寿亭侯に進められ、資は関内侯たり。明帝即位（二二七）し、尤も寵任せられ、共に散騎常侍を加へらる。放を爵西郷侯に、資を樂陽亭侯に進む。大和の末（二二二）、……帝は邀へて之を討たんと欲するも、朝議は多く以って不可と為す。惟だ資のみ決して策を行ふ。果たして大いに之を破り、爵を左郷侯に進む。……景初二年（二三八）、遼東平定は、参謀の功を以ってす。各々爵を進め、本県に封ず。放は方城侯、資は中都侯たり。……正始元年（二四〇）、更に放に左光祿大夫を、資に右光祿大夫を加へ、金印紫授、儀同三司たり。六年（二四五）、放は驃騎に転じ、資は衛將軍たり。領監・令は故の如し。七年（二四六）、……曹爽の誅せられ後、復た資を以って侍中と為し、領中書令たり。嘉平二年（二五〇）、放は薨じ、諡して敬侯と曰ふ。子の正嗣ぐ。資は復た位を遜り第に歸す。就きて驃騎將軍を拜し、侍中に転じ、特進は故の如し。三年（二五一）薨ず。諡して貞侯と曰ふ。子の宏嗣ぐ。放の才計は資に優るも、自脩は如かざるなり。放・資は善く主

上に承順し、又た未だ嘗て顛に得失を言はず、辛毗を抑へて王思を助く、是れを以つて譏りを世に獲たり。然るに時に羣臣の諫諍に困り、其の義を扶賛し、并せて時に密かに損益を陳べ、専ら導諛言ならずと云ふ。

〔魏志〕卷一四劉放伝

(3) 劉放は文翰にして、孫資は勤慎たり。並びに喉舌を管し、権は当時に聞こえ、雅亮は体に非ず。是の故に譏諛の聲は、毎に其の実に過ぎたり。〔魏志〕卷一四程郭董劉蔣劉伝評

② 孫宏

(1) 宏は南陽の太守と為る。宏の子は楚、字は子荆。〔魏志〕卷一四劉放伝注所引『孫氏譜』

(2) 初め資は邦邑に在り、名は同類の右に出でたり。郷人の司空の掾なる田豫、梁の相なる宗艶は皆な之を妬害す。而して楊豊は豫等に党附し、専ら資の為に謗端を構造し、怨隙は甚だ重し。資は既に以つて言を為さずして、終に恨む意無し。豫等は慚服し、宿憾を積めて、結びて婚姻を為さんことを求む。資は之に謂ひて曰はく、吾に憾む心無く、積つる所を知らず。此れ卿自ら之を薄しとし、卿自ら之を厚しと為す耳と。乃ち長子の宏の為に其の女を取る。〔魏志〕卷一四劉放伝注所引『資別伝』

③ 孫楚

(1) 孫楚、字は子荆、太原中都の人なり。〔世説新語〕言語注引『文士伝』

(2) 楚は驃騎將軍の資の孫、南陽太守の宏の子なり。郷人の王濟は、豪俊の公子にして、本州大中正の為に、宏を訪問して郷里の品状を為らんとす。濟曰はく、此（注し）の人は郷評の能く名づくる所に非ず。吾自ら之を状せんと。曰はく、天才英特、亮拔群せずと。仕へて馮翊太守に至る。〔世説新語〕言語注所引『晋陽秋』

(3) 孫子荆 年少き時、隠れんと欲す。王武子（王濟）に語る、当に石に枕し流れに漱ぐべしと。誤りて曰はく、石に漱ぎ流れに枕すと。王曰はく、流れは枕すべく、石は漱ぐべきかと。孫曰はく、流れに枕する所以は、其の耳を洗はんと欲するなり。石に漱ぐ所以は、其の齒を礪かんと欲するなりと。〔世説新語〕排調

(4) 孫子荆 婦の服を除し、詩を作りて以つて王武子（王濟）に示す。王曰はく、未だ知らず、文の情に生ずるか、情の文に生ずるかを。之を覽れば悽然として、伉儷の重きを増すと。〔世説新語〕文学

(5) 婦は胡母氏なり。其の詩に曰はく、時は邁きて停らず、日月は電のごとく流る、神爽は登遐し、忽ち已に一周す、札制に叙有らば、除を靈丘に告げん、祠に臨みて感痛し、中心抽かるるが若しと。〔世説新語〕文学注所引『孫楚集』

(6) 楚は才藻卓絶にして、爽邁羣せず。陵傲する所多く、

郷曲の誉れを缺く。年四十にして始めて参鎮東軍事たり。……楚は後に佐著作郎に遷り、復た石苞の参驃騎軍事たり。楚既に其の材氣を負み、頗る苞を侮易す。

……惠帝の初め(二九〇)、馮翊太守と為る。元康三年(二九三)卒す。〔晋書〕卷五六孫楚伝)

④ 孫衆・孫洵・孫纂

(1) 三子あり、衆・洵・纂なり。衆及び洵は俱に未だ仕

へずして早に卒す。(〔晋書〕卷五六孫楚伝)

(2) 父は恂、(注3)潁川太守なり。恂は郡に在りて賊に遭ひ害

せらる。(〔晋書〕卷八二孫盛伝)

⑤ 孫盛

(1) 孫盛、字は安国、太原中都の人なり。博学強識にして、著作郎・瀏陽令を歴たり。庾亮の荊州と為るや、以って征西主簿と為す。秘書監に累遷す。(〔世説新語〕言語注所引〔中興書〕)

(2) 盛の年十歳、難を避けて江を渡る。長ずるに及び、博学にして善く名理を言ふ。時に于いて殷浩は名を一時に擅にす。与に抗論する者は惟だ盛なる而已。盛は嘗て浩に詣る。談論して食に對し、塵尾を奮擲すれば、毛は悉く飯中に落つ。食冷えて復た暖むること数四、暮に至るまで食を忘るも、理竟に定まらず。盛又た医ト及び易象は見形よりも妙なる論を著はす。浩等は竟

に以って之を難ずること無し。是れに由りて遂に名を知らる。起家は佐著作郎たり。家貧しく親老いたるを以って、小邑と為らんことを求め、出でて瀏陽令に補

せらる。……庾翼の亮に代るや、盛を以って安西諮議

参軍と為し、尋で廷尉正に遷る。……蜀平ぎて、爵を安懷県侯に賜ひ、温の従事中郎に累遷す。関に入り洛

を平ぐるに従ひ、功を以って封を呉昌県侯に進められ、出でて長沙太守に補せられる。……秘書監に累遷し、

給事中を加へらる。年七十二にして卒す。盛は篤学にして倦まず。少き自り老に至るまで、手は卷を釈てず。

『魏氏春秋』『晋陽秋』を著はす。并せて詩・賦・論・難を造ること復た数十篇なり。『晋陽秋』は詞は直

にして理は正しく、威な良史と称す。既にして桓温は之を見て怒り、盛の子に謂ひて曰はく、枋頭(の地)

は誠に利を失ふと為す。何ぞ乃ち尊君の説く所の如くなるに至らん。若し此の史行はるれば、自らはれ君が

門戸の事に関らんと。其の子は遽に拝謝し、之を刪改するを請ふを請ふ。時に盛は年老いて家に還れり。性

は方嚴にして軌憲有り。子孫班白なりと雖も、庭訓は逾々峻し。此に至りて諸子は乃ち共に号泣し、稽顙し

て百口の為に切に計らんことを請へり。盛は大いに怒り、諸子は遂に窃かに之を改む。盛は両つの定本を写

して慕容儁に寄す。太元中(三七六―三九六)、孝武帝

博く異聞を求むるに、始めて遼東より之を得、以つて相ひ考校するも、多く同じからざる有り。書は遂に両つながら存す。〔晋書〕卷五二孫盛伝）

⑥ 孫統

(1) 孫統、字は承公、太原の人なり。善く文を属し、時人謂ふ、其れ相楚の風有りと。仕へて余姚令に至る。

〔世説新語〕品藻注所引〔中興書〕

(2) 承公は少くして誕任不羈。会稽に家し、性は山水を好む。鄞県を求むるに及び、心を細務に遺れ、意を縦にして游肆す。名阜勝川をば、歴覽させるは靡し。

〔世説新語〕任誕注所引〔中興書〕

(3) 蕭中郎（蕭輪）は孫丞公（注）の婦の父なり。〔世説新語〕賞誉）

(4) 纂の子の統・綽は並びに名を知らる。〔晋書〕卷五六孫楚伝）

⑦ 孫潜

(1) 孫潜、字は斉由、太原の人なり。〔世説新語〕言語注所引〔晋百官名〕）

(2) 孫潜は盛の長子なり。豫章太守たり。殷仲堪の下りて王国宝を討つや、潜は時に郡に在り。逼りて諮議参軍と為さんとするも、固辞して就かず。遂に憂を以つて卒す。〔世説新語〕言語注所引〔中興書〕）

⑧ 孫放

(1) 放、字は斉莊、監君（孫盛）の次子なり。年八歳のとき、太尉の庾公（庾亮）は召して之を見る。放は清秀、觀試せんと欲し、乃ち紙筆を授けて書せしむ。放は便ち自ら名字を疏す。公は後に題し之に問ひて曰はく、莊周を慕はんと欲するを為すやと。放は書し答へて曰はく、意は之を慕はんと欲すと。公曰はく、何の故に仲尼を慕はずして莊周を慕ふやと。放曰はく、仲尼は生まれながらにして之を知る。希企して及ぶ所に非ず。莊周に至りては、是れ其の次なる者なり。故に慕ふ耳と。公は賓客に謂ひて曰はく、王輔嗣（王弼）の応答すら、恐らくは之に勝ること能はざらんと。長沙王の相に卒す。〔世説新語〕言語注所引〔孫放別伝〕）

(2) 孫盛は庾公（庾亮）の記室参軍為りしとき、獵に從ひ、其の二兒を將るて俱に行く。庾公知らずして、忽ち獵場に於いて斉莊を見る。時に年七八歳なり。庾謂ひて曰はく、君も亦た來たるかと。声に應じて答へて曰はく、所謂小と無く大と無く、公に従ひて于き邁くと。〔世説新語〕言語）

(3) 放兄弟は並びに秀異にして、庾翼の子の爰客と共に学生為り。爰客は少くして佳称有り。談笑に因りて放を嘲りて曰はく、諸孫は今に於いて盛んなりと為すと。盛は監君（放の父）の諱なり。放は即答して曰はく、未だ諸庾の翼翼たるに若かずと。放は機に應じて勝ち

を制し、時人焉を仰げり。司馬景王（司馬師）・陳・鍾の諸賢相ひ酬ゆるも、以って踰ゆること無きなり。

〔世説新語〕排調注所引『孫放別伝』

⑨ 孫騰

(1) 騰、字は伯海、太原の人なり。（『世説新語』品藻注所引『晋百官名』）

(2) 騰は統の子なり。博学にして、中庶子・廷尉を歴たり。（『世説新語』品藻注所引『中興書』）

(3) 僧奴は孫騰の小字なり。（『世説新語』品藻注）

(4) 衛君長（衛永）は是れ蕭祖周（蕭輪）の婦の兄なり。

謝公（謝安）孫僧奴に問ふ、君が家の衛君長を道ふは云何と。孫曰はく、是れ世業の人なりと云へりと。

謝曰はく、殊に爾らず。衛は自ら是れ理義の人なりと。時に于いて以って殷洪遠（殷融）に比す。（『世説新語』品藻）

⑩ 孫登

(1) 騰の弟は登、少くして名理を善くす。『老子』に注し、世に行はる。仕へて尚書郎に至り、早に終ふ。（『晋書』卷五六孫統伝）

(2) 老子道德経二卷音一卷 晋尚書郎 孫登注（『隋書』卷三四 経籍志二）

⑪ 孫嗣

(1) 子は嗣、綽の風有り。文章は相ひ垂ぎ、位は中軍参

軍に至り、早に亡す。（『晋書』卷五六孫綽伝）

⑫ 孫阿恒

(1) 阿智は王处之の小字なり。处之、字は文将、州の別駕に辟さるるも、就かず。太原の孫綽の女、字は阿恒を娶る。（『世説新語』假譎注）

(2) 王文度（王坦之）の弟の阿智は、悪しくして乃ち翹ならず。年長ずるに当たたるも、人の与に婚する無し。

孫興公（孫綽）に一女有り。亦た僻錯にして、又た嫁娶の理無し。因りて文度に詣り、阿智を見んことを求む。既に見て、便ち陽りて言ふ、此れ定めて可なり。

殊に人の伝ふる所の如くならず。那ぞ今に至るまで未だ婚する処有らざるを得ん。我に一女有り、乃ち悪しからず。但だ我は寒士にして、宜しく卿と計るべからざるも、阿智をして之を娶らしめんと欲すと。文度は欣然として藍田（父の王述）に啓して云ふ、興公向に來たりて、忽ち言ふ、阿智と婚せんと欲すと。藍田は驚喜す。既に婚を成せば、女の頑嚚なるは阿智より過ぎんとす。方めて興公の詐りなるを知れり。（『世説新語』假譎）

※複数の伝記

(1) 宏は南陽太守為り。宏の子は楚、字は子荆。（『魏志』卷一四劉放伝注所引『孫氏譜』）

(2) 楚は討虜護軍・馮翊太守に至る。楚の子は洵、潁川

太守。洵の子は盛、字は安国、給事中・秘書監。盛の従父弟の綽、字は興公、廷尉正。楚及び盛・綽は並びに文藻有り。盛は又た善く名理を言ふ。諸々の論著する所は、並びに世に伝はる。〔魏志〕卷一四劉放伝注所引『晋陽秋』

(注)

1 『晋書』卷五六孫楚伝は「初め楚は同郡の王濟と友として善し。濟は本州大中正の為に訪問し、邑人を銓し、品状して楚に至る。濟曰はく、此の人は卿の目する所に非ず。吾自ら之を為らんと。乃ち楚を状して曰はく、天才英博、亮拔羣せず」とに作り、『晋書』劉放伝注の「〔魏志〕孫資伝注の『晋陽秋』に曰はく、楚の郷人の王濟は豪俊の公子なり。本州大中正の為に関を訪問して楚の品状を求むと。案ずるに、『世説』言語篇に『宏を訪問して郷里の品状を為る』に作るを引くは、誤るに似たり。楚の事を以って其の父の宏の事と為す」という。『世説新語』(明治書院)は「〔世説〕原文の『宏』は衍字か」という。

2 『晋書』校勘記に「孫洵は、孫盛伝及び『魏志』劉放伝注に『晋陽秋』を引きて俱に云ふ、潁川太守と為ると。未だ仕へざるに非ず」とある。

3 『晋書』勅注に「〔廿二史攷異〕二十二に曰はく、孫楚伝は洵に作る。此の伝に拠れば、洵は潁川太守と

為り、郡に在りて賊に遭ひ害せらる。而も楚伝に洵は未だ仕へずして早に終ふの二文は、自ら相ひ矛盾す。之を攷ふるに、『晋陽秋』は則ち潁川太守なり。是れが為にして名は当に洵に為るべきなり」という。

4 ⑥(1)では、「丞」の字を「承」に作る。「丞」は、「承」の誤りであろう。

5 ⑥(1)では、「統」の字を「統」に作る。「統」は、「統」の誤りであろう。

II 孫綽の交遊

孫綽と交遊のあった人々を『晋書』本伝、『世説新語』より抜き出すと、次のような人たちである。

謝尚	王濛	王羲之	王述	王彪之	褚裒	庾亮	溫嶠	竺潛	郗鑒	王導	陸機	潘岳	姓名
仁祖	仲祖	逸少	懷祖	叔武	季野	元規	太真	法深	道徽	茂弘	士衡	安仁	字号
陽夏	太原	臨沂	晉陽	臨沂	河南	鄆陵	太原	瑯琊	高平	臨沂	吳郡	滎陽	貫籍
三〇九	三〇九	三〇七	三〇五	三〇五	三〇三	二八九	二八八	二八六	二六九	二六七	二六一	二四七	生年
三五八	三四七	三六五	三六八	三七七	三四九	三四〇	三二九	三七四	三三九	三三九	三〇三	三〇〇	卒年
		1		1									同席
		2			1	1		1					會話
1	1										2	2	(1) 話題
		1	1										(2) 話題
〔晉書〕七九	〔晉書〕九三	〔晉書〕八〇	〔晉書〕七五	〔晉書〕七六	〔晉書〕九三	〔晉書〕七三	〔晉書〕六七	〔高僧傳〕四	〔晉書〕六七	〔晉書〕六五	〔晉書〕五四	〔晉書〕五五	伝記

袁喬	衛永	殷融	習鑿齒	殷浩	司馬無忌	韓伯	王坦之	許詢	司馬昱	謝安	謝萬	支遁	劉惔	桓溫
彥叔	君長	洪遠	彥威	深源	公壽	康伯	文度	玄度	道萬	安石	萬石	道林	真長	元子
陳留	成陽	陳郡	襄陽	陳郡	琅邪	潁川	晉陽	高陽	琅邪	陽夏	陽夏	河內	沛國	菴亢
						三三二	三三〇	三三三	三三〇	三三〇	三三〇	三二四	三二三	三二二
			三八四	三五六	三五〇	三八〇	三七五	三五二	三七二	三八五	三六一	三六六	三四八	三七三
	1					1	1		1	1		1	1	
			1		1		1	1	1	1	1	3		1
1		1										2	2	1
1		1												1
『晉書』八三	賞譽注『衛氏譜』	文學注『中興書』	『晉書』八二	『晉書』七七	『晉書』三七	『晉書』七五	『晉書』七五	言語注『統晉陽秋』	『晉書』九	『晉書』七九	『晉書』七九	『高僧傳』四	『晉書』七五	『晉書』九八

或ルヒト	李充	庾羲	北来道人	范啓	謝奉	曹毗	江彪	孔沈	高柔	阮裕	虞存	虞球	魏顗	王孝伯
	弘度	叔和		采期	弘道	輔付	思玄	德度	世遠	思曠	道長	和琳	長齊	
	江夏	鄢陵		慎陽	会稽	譙国	陳留	会稽	樂安	陳留	会稽	会稽	会稽	太原
	1		1				1							
				1					1					
					1	1		1		1	1	1	1	
1		1												1
	〔晋書〕九二	〔晋書〕七三		〔晋書〕七五	雅量注〔晋百官名〕〔謝氏譜〕	〔晋書〕九二	方正注〔徐広晋紀〕	言語注〔孔氏譜〕	輕詆注〔柔集叙〕	〔晋書〕四九	政事注〔虞存誄〕	賞誉注〔虞氏譜〕	排調注〔魏氏譜〕	

姓名	字号	貫籍	官職	系譜	伝記
王羲之	逸少	臨沂	右將軍	王凝之らの父	『晋書』八〇
謝安	安石	陽夏	瑯邪王	謝万の兄	『晋書』七九
謝万	万石	陽夏	司徒左西属	謝安の弟	『晋書』七九
徐豊之		東海	行参軍	徐寧の子	
孫統	承公	太原	前余杭令	孫綽の兄	『晋書』五六
王彬之	道生	広漢	前永興令		
王凝之	叔平	臨沂	(会稽内史)	王羲之の子	『晋書』八〇

(表の説明)

- 1 「同席」の数は、孫綽が席を同じくし、しかも会話をしない数をいう。
- 2 「会話」の数は、孫綽が会話をした数をいう。ただし、応と答との両方・一方の区別はしない。
- 3 「話題」(1)の数は、席を同じくしない人を孫綽が話題にする数をいう。
- 4 「話題」(2)の数は、席を同じくしない人が孫綽を話題にする数をいう。

- 5 生年・卒年が判明する者は生年順に、不明の者は、ア・イ・ウ順に並べた。
 - 6 王導・郗鑒・温嶠には碑文を作り、殷浩にはその部下となる関係であったために、「同席」→「話題」(2)は空欄とした。
- また、孫綽は王羲之の主宰した蘭亭の会に参加しており、その席に参集した者はすべて四二人である。孫綽を除く他の四一人は次の者である。

王玄之	桓偉	曹華	曹茂之	庾蘊	謝繹	魏滂	虞說	庾友	華茂	王豐之	郗曇	袁嶠之	王徽之	王肅之
			永世					弘惠之彦			重熙		子猷	幼恭
臨沂	譙國		彭城	潁川				潁川	広陵		高平	陳郡	臨沂	臨沂
		徐州西平	行參軍	(広州刺史)	郡五官	郡功曹	鎮軍司馬	(東陽太守)	前上虞令	行參軍	散騎常侍			(諮議參軍)
王羲之の子	桓玄の兄		曹曼の子	庾友の弟				庾蘊の兄	華譚の子				王羲之の子	王羲之の子
【晋書】八〇	【晋書】九九		品藻注「曹氏譜」	【晋書】七三				【晋書】七三	【晋書】五二		【晋書】六七		【晋書】八〇	排調注「王氏譜」

任凝	華耆	后綿	勞夷	虞谷	劉密	孔熾	楊模	王猷之	丘旄	卞迪	謝瑰	孫嗣	王渙之	王蘊之
								子敬						叔仁
								臨沂				太原		太原
府主簿	前長岑令	府主簿	府功曹	山陰令	參軍	參軍	行參軍	(吳興太守)	行參軍事	鎮国大將軍掾	侍郎	前中軍參軍		(会稽内史)
								王羲之の子				孫綽の子		王濛の子
								『晋書』八〇				『晋書』五六		『晋書』九三

曹 謹	呂 本	呂 系	謝 藤
彭 城	任 城	任 城	
			前余杭令

(表の説明)

- 1 「袁嶠之」までの十人は詩兩篇を成した者(孫綽も兩篇をなす)、「孫嗣」までの十五人は詩一篇を成した者、「謝瑰」以下の十六人は詩の成らなかつた者である。
- 2 「官職」欄の括弧内は、「伝記」欄の資料により補う。
- 3 「桓偉」を『雲谷雜記』は「柏偉」に作るが、いま『古詩紀』に従う。また、「桓偉」の貫籍を「滎陽」とすることについて、『古詩紀』注には「此に滎陽と云ふは、未だ是否を知らず」という。いま『晋書』に従い、貫籍を「譙国」とする。
- 4 「王蘊之」は逢欽立『全晋詩』注の「蘊之、一に蘊と名づく。字は叔仁、広漢の人なり」に従う。

Ⅲ 孫綽の評価

孫綽は在世中、どのような評価を得ていたのか。

孫興公(孫綽)・許玄度(許詢)は、皆な一時の名流なり。或るひとは許の高情を重んじ、則ち孫の穢行を鄙しとす。或るひとは孫の才藻を愛して、許に取るもの無しと。(『世説新語』品藻)

綽は文才有りと雖も、誕縦にして穢行多し。時人は之を鄙しむ。(『世説新語』品藻注所引『統晋陽秋』)

これによると、A「穢行」とB「才藻」との二つの面が評価の対象となっていたことがわかる。この二つの面を資料によって具体化することにする。

A 「穢行」の面

(1) 詢は卒に志を降さざるも、綽は世務に嬰綸す。(『世説新語』品藻注所引宋明帝『文章志』)

孫綽は許詢とは違って志を曲げ、「世務」(世俗の事

務)に関わつたこと。

(2) 孫長樂(孫綽)の兄弟は、謝公(謝安)に就きて宿せしとき、言は至つて款雑なり。劉夫人は壁の後に在りて之を聴き、具に其の語を聞く。謝公は明日還りて問ふ、昨の客は何似と。劉は対へて曰はく、亡き兄の門には、未だ此くの如き賓客有らずと。謝には深く愧づる色有り。

(『世説新語』輕詆)

「款雑」(心を許して遠慮することなく、気安くうちとけて話しあう)であつたこと。

(3) 王文度(王坦之)の弟の阿智は、悪しくして乃ち翹ならず。年長ずるに当たるも、人の与に婚する無し。孫興公(孫綽)に一女有り。亦た辟錯にして、又た嫁娶の理無し。因りて文度に詣り、阿智を見んことを求む。既に見て、便ち陽りて言ふ、此れ定めて可なり。殊に人の伝ふ所の如くならず。那ぞ今に至るまで未だ婚する処有らざるを得ん。我に一女有り、乃ち悪しからず。但だ我は寒士にして、宜しく卿と計るべからざるも、阿智をして之を娶らしめんと欲すと。文度は欣然として藍田(父の王述)に啓して云ふ、興公向に來たりて、忽ち言ふ、阿智と婚せんと欲すと。藍田は驚喜す。既に婚を成せば、女の頑嚚なるは阿智より過ぎんとす。方めて興公の詐りなるを知れり。(『世説新語』佞諂)

娘の「頑嚚」(頑固で愚鈍)さをおし隠し、言葉巧み

に王家をだまして結婚にもちこんだこと。

(4) 孫興公(孫綽)は庾公(庾亮)の誄を作るに、文には託寄の辞多し。既に成るや、庾道恩(庾亮の子)に示す。庾は見て、慨然として之を送り還して曰はく、先君と君とは、自ら此に至らずと。(『世説新語』方正)

亡き父と孫綽との関係は、孫綽がいうほど「託寄」(心を寄せあうこと)の間柄ではないと否定されたこと。

(5) 孫長樂(孫綽)は王長史(王濛)の誄を作りて云ふ、余と夫子とは、交りは勢利に非ず、心は猶ほ澄水のごとく、此の玄味を同じくすると。王孝伯(王濛の孫)見て曰はく、才士は不遜なり。亡き祖は何ぞ此の人と同旋するに至らんと。(『世説新語』輕詆)

亡き祖父と孫綽との関係は、孫綽がいうほどの間柄ではなく、孫綽を「不遜」(従順でないこと)ときめつけていること。

(6) 桓公(桓温)は都を遷して以つて拓定の業を張らんと欲す。孫長樂(孫綽)上表して諫むるに、此の議は甚だ理有り。桓は表を見て心服するも、其の異を為すを忿り、人をして意を孫に致さしめて云ふ、君は何ぞ遂初の賦を尋ねずして、疆ひて人の家国の事を知るやと。(『世説新語』輕詆)

「遂初の賦」では止足の分(欲望を棄てて自分の分に安んじること)を説きながら、「人の家国の事」(他

人の国家経営)に干渉すること。

B 「才藻」の面

「才藻」を、ア、孫綽の詩文がどのように評価されたか、イ、老荘への傾倒がどのように評価されていたか、ウ、他人の文章をどのように批評していたか、エ、他の人物をどのように批評していたか、の四つに分けて具体化する。

ア 詩文の評価

(1) 綽は博く經史に涉り、文を属するに長ず。許詢と俱に俗を負ふの談有り。(『世説新語』品藻注引宋明帝『文章志』)

「經史」(經書と史書)に通じ、「文」を書くのにすぐれ、「俗を負ふの談」(超俗の談論)に得意であったとされたこと。

(2) 詢・綽は並びに一時の文宗為り。此れ自り作者は悉く之を休す。(『世説新語』文学注所引『続晋陽秋』)

当時の文壇の中心的存在であったとされたこと。

(3) 孫興公(孫綽)・許玄度(許詢)は共に白樓亭に在りて、共に先往の名達を商略す。林公(支遁)既に關する所に非ず。聴き訖りて云ふ、二賢は故より才情有りと。

〔『世説新語』賞譽〕

時の仏僧支遁から「才情」(才智と情趣)ありと称されたこと。

(4) 支道林(支遁) 孫興公(孫綽)に問ふ、君は許掾に

何如と。孫曰はく、高情遠致は、弟子早に已に服膺せり。一吟一詠は、許將に北面せんとすと。

「一吟一詠」(詩歌を作ること)では、許詢よりすぐれていると自認していること。

(5) 時に于いて、才筆の士は、綽を其の冠と為す。(『文選』卷一一孫綽「遊天台山賦」注所引何法盛『晋中興書』) 当時の文筆家は、孫綽を第一人者と評価したこと。

イ 老荘の評価

(1) 孫綽は遂初を賦すや、室を畎川に築く。自ら言ふ、止足の分を見たりと。齋前に一株の松を種ゑ、恒に自手ら之を壅治す。高世遠(高柔)時に亦た鄰居す。孫に語りて曰はく、松樹子は楚楚として憐むべからざるに非ざるも、但だ永く棟梁の用無き耳と。孫曰はく、楓柳は合抱なりと雖も、亦た何ぞ施す所あらんと。(『世説新語』言語)

「止兄之分」(欲望を棄て自分の分に安んじること)をわきまえていたこと。

(2) 遂初の賦の叙に曰はく、余は少くして老荘の道を慕ひ、其の風流を仰ぐこと久し。却きて於陵の賢妻の言に感じ、悵然として之を悟る。乃ち東山に經始し、五畝の宅を建つ。長阜を帯び、茂林に倚るは、華幕に坐し鍾鼓を撃つ者に孰与れぞや。年を同じくして其の樂しみを語らんやと。(『世説新語』言語注)

「老莊之道」(無為自然の道)を慕い続けていること。
 (3) 万集には、四隠四顕を叙し、八賢為るの論を載す。漁父・屈原・季主・賈誼・楚老・龔勝・孫登・嵇康を謂ふなり。其の旨は処る者を以つて優れりと為し、出づる者を劣れりと為す。孫綽は之を難ず。以つて玄を体し遠を識る者は、出処するも帰を同じくすと謂ふ。文多ければ載せず。〔世説新語〕言語注)

出仕する者は優、出仕せぬ者は劣とする謝万の八賢論に対して、孫綽は出仕するせぬに関係なく、「玄を体し遠を識る」(玄遠を体得し知る)ことこそが大切であるとする。

(4) 世に称すらく、孫(孫綽)・許(許詢)は、彌々恬淡の詞を善くすと。〔詩品〕卷下)

孫綽は許詢とともに、「恬淡之詞」(無欲の言葉)に巧みであったこと。

ウ 文章批評

(1) 孫興公(孫綽)云ふ、潘(岳)の文は爛なること錦を披るが若く、処として善からざるは無し。陸(機)の文は沙を排けて金を簡ぶが若く、往往にして宝を見ると。〔世説新語〕文学)

西晋の詩人潘岳と陸機を比較して、それぞれの文章の巧みさを贅えていること。

(2) 孫興公(孫綽)云ふ、潘(岳)の文は浅くして淨し。

陸(機)の文は深くして蕪しと。〔世説新語〕文学)

(1)と同様に潘岳と陸機を比較して、それぞれの文章の長短を批評していること。

(3) 孫興公(孫綽)道ふ、曹輔佐(曹毗)の才は、白地の明光錦もて裁ちて負版の袴を為るが如し。文采無きに非ざるも、酷だ裁製無しと。〔世説新語〕言語)

東晋の詩人曹毗の文才を、「文采」(あや模様)はあるが、「裁製」(織り方)を知らぬと評していること。

(4) 孫興公(孫綽)庾公(庾亮)の参軍と為るや、共に白石山に遊ぶ。衛君長(衛永)も坐に在り。孫曰はく、此の子は神情都て山水に関らざるも、能く文を作ると。

庾公曰はく、衛の風韻は、卿諸人に及ばずと雖も、傾倒する処は亦た近からずと。孫は遂に此の言に沐浴す。〔世説新語〕賞誉)

東晋の詩人衛永は「山水」には関心を示さぬが、文章能力があると評価していること。

エ 人物批評

(1) 謝公(謝安)云ふ、林公(支遁)の双眼を見るに、黯黯として明黒しと。孫興公(孫綽)は林公を見るに、稜稜として其の爽を露はすと。〔世説新語〕容止)

東晋の仏僧支遁を、「稜稜」(威厳のあるさま)として、「其の爽を露はす」(抜群の聡明さを持している)と評価していること。

(2) 王文度(王坦之)は西州に在りて、林法師(支遁)と講ぜしとき、韓(韓伯)・孫(孫綽)の諸人並びに坐に在り。林公(支遁)の理は毎に小しく屈せんとす。孫興公(孫綽)曰はく、法師は今日、弊絮を著て、荆棘の中に在るが如し。触地挂闕すと。(『世説新語』排調)

(1)と同じ支遁の論理のぐらつくさまを、「弊絮」(破れた綿入れ)を着て、「荆棘」(雑草)の中にいるよ
うだと厳しく評価していること。

(3) 会稽の孔沈・魏顓・虞球・虞存・謝奉は、並な是れ四族の儁にして、時に于けるの桀なり。孫興公(孫綽)は之を目して曰はく、沈は孔家の金為り、顓は魏家の玉為り。虞は長(虞存)・琳(虞球)を宗と為し、謝は弘道(謝奉)に伏と為ると。(『世説新語』賞誉)

孔・魏・虞・謝の会稽四族の俊才を、句を整え、句末に「金」「玉」「宗」「伏」を置いて批評していること。

(4) 撫軍(司馬昱)は孫興公(孫綽)に問ふ、劉真長(劉惔)は何如と。曰はく、清蔚にして簡令なりと、王仲祖(王濛)は何如と。曰はく、温潤にして恬和なりと。桓温は何如と。曰はく、高爽にして邁出せりと。謝仁祖(謝尚)は何如と。清易にして令達なりと。阮思曠(阮裕)は何如と。曰はく、弘潤にして通長せりと。袁羊(袁喬)は何如と。洮洮として清便なりと。殷洪遠(殷融)は何如と。曰はく、遠く思ひを致す有りと。卿自らは何如と

謂へるやと。曰はく、下官の才能の経る所は、悉く諸賢に如かず。時宜を斟酌し、当世を籠罩するに至りては、亦た及ばざる所多し。然るに不才を以って、時に得た懐ひを玄勝に託し、遠く老莊を詠じ、蕭條として高奇し、時務と懐ひを経ざるは、自ら謂へらく、此の心は与には譲る所無きなりと。(『世説新語』品藻)

東晋時代の「風流人」七人を批評し、最後に孫綽自身を批評していること。七人に対する評語は異なるが、「風流人」としての素質を高く評価する意味においては、その方向性は帰を一にする。孫綽みずからについては、「才能」および「時宜を斟酌」(時の都合を考へる)し、「当世を籠罩」(今の世を治める)する点では、「諸賢」(七人)には及ばぬが、「懐ひを玄勝に託」(心を玄奥の世界に寄せる)し、「遠く老莊を詠」(心遠く老子や莊子を誦んじる)じ、「蕭條として高寄」(心静かに高き世界に身を寄せる)し、「時務と懐ひを経ず」(世俗の務めに心を煩わさない)という点では、「譲る所無きなり」(だれにも劣るものではない)と評し、自分も七人に勝るとも劣らぬ「風流人」であり、世俗には無関心であることを力説する。

(平成元年八月二五日)